

令和2年度・令和3年度 長野県青少年赤十字研究推進校

# 研究報告書

研究テーマ

「自己の考えを広げ深める生徒の育成」

～被災地から学ぶ～



長野県千曲市立 屋代中学校

# 目 次

|     |                   |       |
|-----|-------------------|-------|
| I   | 研究テーマ             | … 1   |
| II  | 研究テーマ設定の理由及び内容と経過 | … 1   |
| III | 授業の流れと様子          | … 1 2 |
| IV  | 授業研究会記録           | … 1 5 |
| V   | 成果と課題             | … 1 7 |
| VI  | 資料                | … 1 8 |

# 令和3年度 長野県青少年赤十字研究推進校発表会

## I 研究テーマ

「自己の考えを広げ深める生徒の育成」～被災地から学ぶ～

## II 研究テーマ設定の理由及び内容と経過

本校では、学校教育目標「どんな花でも精一杯に ～夢に誇りのせて～」の具現に向け、学ぶ意欲をもって課題を設定し、解決の方法について考え、調査・実験・制作などの「直接体験活動を通して得た事実を的確に解釈し、学び得た事柄を生き生きと発信できる生徒の姿を願っている。それは、学び知ったことを、実際に見たり聞いたりして体験し、そのことを人に伝えたり実際に行動するというサイクルを繰り返しながら、学んでいくという姿だと考える。

本校の3年生は2年前の台風19号での千曲川の越水、浸水被害の経験をした。その時、屋代中学校が避難所となり、中学校に避難した生徒、自宅が浸水被害を受けた生徒もいた。そのことを受け、昨年度は11月に「地域の災害経験に学ぶ」とし坂城町在住の竹内正美さんに講演をしていただいた。その中で「ネガティブな状況からしなやかに回復する力＝レジリエンスが必要」というお話を伺った。

3学年では、2年生の時から防災学習に取り組み、3月には東北地方へ研修旅行に行き、東日本大震災での被災地を訪れ、実際に見たり聞いたりして学習をした。また、事前の学習では、東日本大震災についての映像を見たり、斎藤幸男先生からリモートでお話を伺ったりした。東日本大震災を知らない生徒たちにとって、まず当時の実際の映像を見せることが一番だと考え、学習の導入として津波の映像を視聴した（『巨大津波の脅威～いつ どこで また～』）。映像を観た生徒からは、「思っていたよりはるかに怖く恐ろしいものだった。」「助かることだけを考えて逃げなければならないとわかった。」「津波の恐ろしさを正しい知識としてもち、研修旅行では自分たちにできることを考えていきたい。」という感想があった。

また、斎藤先生の事前リモート講演では、災害時における人間の心理状態や震災後の学校の再開、心のケアについてのお話を伺った。「ひとつ上をめざす」と題し、「生徒を育てるのは生徒。教師を育てるのも生徒。学校を作るのは生徒。」というお話をしていただき、生徒たちは「自分たちと同じ中学生が笑顔になることで、先生たちも支えられて成長できるのだと思った。自分から行動を起こすことが大切。」「まず自分の命を最優先に。頑張れ、ではなく、その人に寄り添い、解決を目指すことが大切。」という感想があり、「命や災害について学んで、学んだことを誰かに伝えていきたい。」という思いが生まれてきた。



3月の研修旅行では、震災の学習を中心に、1日目は、南三陸町で被害の大きかった旧防災庁舎を訪れ、震災当時と現在の様子についてお話を伺ったり、避難所となったホテルや震災当時高校生だった方の避難所生活についてのお話を伺ったりした。2日目はクラス別に分かれ、それぞれの被災地の様子を学んだ。震災10年を迎え、語り部の方から当時の様子、これまでの経過をお聞きし、現在の様子を実際に見て感じ、学んだことは、生徒にとって有意義なものとなった。

学校に戻ってきてからは、始業式の作文（資料1）で研修旅行で感じたことや今後の自分の思いを全校に伝えたり、自分たちが学んだことや考えたことをスライドにまとめ（資料2）、防災についての学習発表を班ごとに行ったりした。自分の分たちが学んできたことを伝えたいという思いを実現していく活動を行ってきた。

7月には斎藤先生をお招きし、避難所ワークショップを行い、避難所運営や自分たちの役割について考えた。また千曲市防災課の方に、「防災講演」をしていただき、自分たちの地域の災害や防災について調べ、まとめた（資料3）。

JRCの研究授業では、斎藤先生、東日本大震災当時小学生だった東北学院大学在籍の雁部さん、千曲市の防災課の和田さん、生徒と「千曲市の防災の未来～災間を生きる私たちが今すべきこと～」と題し、パネルディスカッションを行い、自分たちの地域の災害について知り考え、今後の千曲市の防災に大きくかかわっていくことだという意識をもって生活している。（資料4）

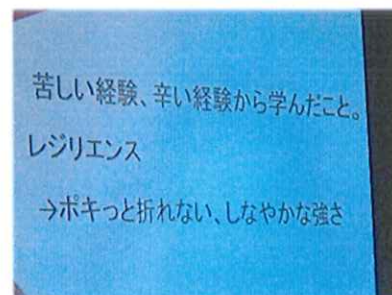
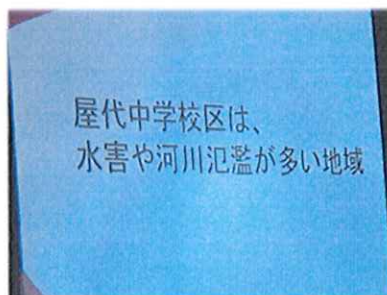
### これまでの学習活動の様子



### 【避難所となった屋代中学校】

2019年10月、台風19号の時の屋代中学校。左は体育館。右は2階のホール。この夜は、体育館と杏道館（柔剣道場）、各階のホールに大勢の人が避難した。受付された方だけで777人避難した。しかし、実際は受付で名前を書かずに避難された方もいて、1,000人近くになっていた。

### 【講演会「地域の災害に学ぶ」】



地元（千曲市土口）出身、竹内正美さんの講演会の様子。生徒たちに身近な公園等の写真も使いお話していただいた。自分たちの知っている場所の被害について、真剣に話を聞いていた。

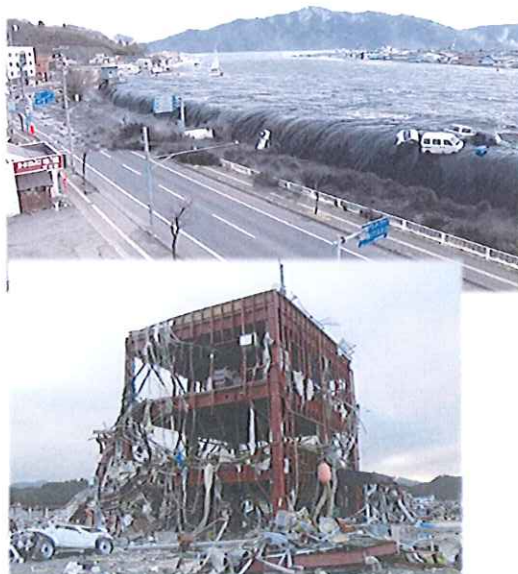
「改めて被災のことを教えてもらいましたが、私も、竹内さんと同じ土口に住んでいるので、気持ちがわかるな、と思って聞いていました。被災した人たちだけでなく、みんなで協力して助け合う大切さや、どうすればいいのだろうという前向きな考えはとても良いなと思いました。地区、家ごとにそれぞれの工夫がしてあることも知れてよかったです。」（生徒の感想より）



### 【津波映像の視聴】

「思っていたよりはるかに怖く恐ろしいものだった。」（生徒の感想より）

当時の被害を知らない生徒たちにとっては衝撃的だったようだが、この映像をきっかけに東日本大震災について知ることができ、さらに災害について学びたいという思いも生まれてきた。



### 【齋藤先生リモート講演】

「生徒を育てるのは生徒。

先生を育てるのは生徒。

学校を作るのは生徒。」（齋藤先生）

令和3年2月、宮城県にお住いの齋藤先生とリモートでつなぎ、「災間を生きる君たちへ」と題した講演をお聞きした。「大人はこれまでの経験があるからこそ、油断し、判断を誤る」「まさかね（ここまで津波は来ないだろう）」等、生徒たちの心に響く言葉がたくさんあった。

「自分たちと同じ中学生が笑顔になることで、先生たちも支えられて成長できるのだと思った。」

「研修旅行で学んで来たことを、自分も伝えていきたい。」

「自分から行動を起こすことが大切だと思った。」

（生徒の感想より）



### 【研修旅行 係会】



東日本大震災について、当時の様子を調べまとめたり、クラス別の見学地を決めたりした。2日目のクラス別見学地については、東日本大震災について調べていくうち、被害の状況や復興の様子などから、実際に訪れてみたい、自分の目で見てみたい場所をクラスの中でも相談して決定していった。

事前の学習では、被害の状況だけでなく、当時の避難所の様子や現地の学校等についても調べ、震災について広く知ることができた。また、10年たった現在、復興はどのようなになっているのか、どのようにして立ち直っていったのか、研修旅行で見てきたいという思いもわいてきた。

### 【研修旅行 当日】



被害の大きかった、南三陸の旧防災庁舎を見学。当時の様子を伝える遺構を見た生徒たちは、言葉少なく、熱心に語り部の方のお話に耳を傾けていた。細部までよく見たり写真を何枚も撮ったりしていた。

また、学校に戻ってからの学習に役立てるため、生徒たちはタブレットで震災の様子の記録写真を撮った。





## 【2日目 クラス別 被災地見学】

### 1組 名取市閑上



震災の前と後の写真を比べながら、語り部の方のお話を聞いた。現在、海の周りは家を建ててはいけない地域に指定されている。地震発生直後は、一度家に戻ったり、家族を迎えに行ったりして命を落とした人が多かったと言われている。実際の津波の高さを見て「言葉が出なかった」。海沿いにもう家は建てられない、というお話を聞いて、「何にもなくなっちゃったんだね」とつぶやく生徒もいた。

### 2組 亘理町



語り部の方のお話「ここに津波は来ない、ということを信じていた。でもそれは嘘で、そのことを子や孫たちに伝えていきたい。」という言葉が印象的だった。かまぼこ「ささ圭」は海沿いにあった工場が被害にあい、唯一残った店舗で営業を再開した。震災によりかまぼこを作る機械もない中、昔からの手造りの製法でかまぼこ作りを再開した。



### 3組 東松島市



防災キャンプ体験ができる「キボッチャ」で体験。廃校が決まっていた小学校を活用し、災害が起きたときの行動や知恵を事前に身につけ、習慣にしておくことを目的とした施設である。ロープの結び方、ほふく前進などの体験を行った。キボッチャとは、希望・防災・未来（フューチャー）を表している。

### 4組 女川町



震災遺構である、旧女川交番を訪れた。旧女川交番は鉄筋コンクリートで作られていたが、津波の引き波で杭が抜け横倒しになったとされている。鉄筋コンクリートの建物が横倒しになる例は世界的にも珍しく、それだけ津波の大きさ、引き波の強さを表している。「津波記憶石」被災地各地に建てられ、は単に津波の高さだけを記すのではなく、この被害を忘れないためにという思いも込められている。

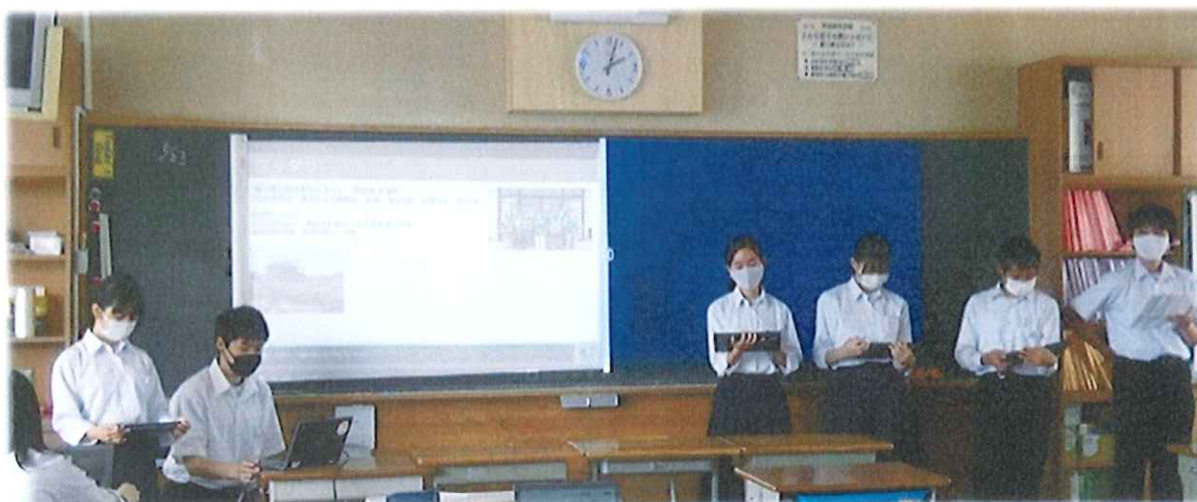
5組 石巻市



大川小学校を訪れ、お話を伺った。当時何度もニュース等で報じられた多くの児童・教職員が命を落とした小学校である。「特別な小学校ではなかった。3月11日までは。」という、小学生の娘さんを亡くされた語り部の方の言葉が心に響いた。たらこ工場の湊水産では、会社、社員全員が被災した。工場の2階を緊急の避難所として、わずかに残っていたお米とたらこで命をつないだ。

【学校に戻ってから ～共有の会～ 】

2日目のクラス別見学について、自分たちが実際に見てきたこと、そのことについて考えたこと、これからのことなど、各班でスライドにまとめ、共有の会を開いた。他のクラスの様子を知るため、学年で班に分かれて行った。

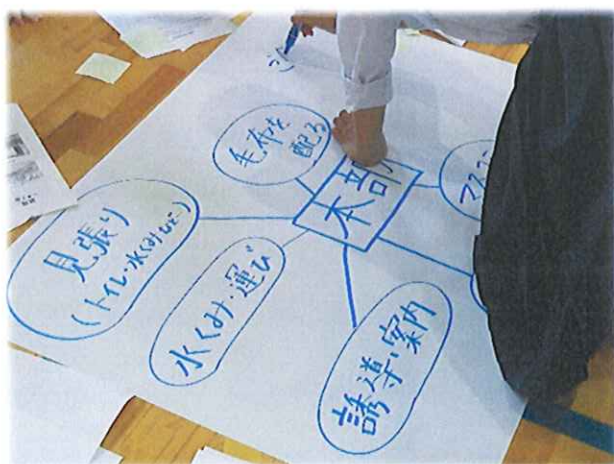




## 【避難所ワークショップ】



避難所には、災害直後から様々な人が避難してくる。「みなさんは何を着て避難しますか？」という斎藤先生の問いに、考えをめぐらす生徒たち。「この学校のことを一番わかっているみんなが、誘導するんだよ、そのためには目立つ服装をするんだよ。」と赤い服を着せられ、災害発生直後にまず何が必要か教えていただいた。さらに、避難所設営の方法を班ごとで考えた。縦割りの組織図は安全安心の時にはいいが、いざ災害が起きたときには隣が何をしているかわからない。大事なものを真ん中に書き、必要なことを書き加えていく「ウェビング」という方法を教えていただいた。班ごとのワークショップでは、誰かに任せたり守られたりするのではなく、自分たちで考え行動していく（書き込んでいく）姿が見られた。





## 【千曲市の防災について ～自分たちにできること～】

8月、千曲市防災課の方に「防災講演会」をしていた。2年前の台風19号の被害の様子や、川の水位、避難するタイミング等についてお話を聞いた。自分の住んでいる場所のハザードマップを確認し、「マイ・タイムライン」の作成を行うなど、自分たちの地域で災害が起きたときどのように行動するのか、また自分たちにできることは何か考え始めるきっかけとなった。

千曲市防災課の方のお話を聞いて、自分たちには何ができるのか考え始めた生徒たちは、これまでの学習をもとに、まとめを行った。一人ひとりスライドにまとめ、クラス内で発表した。



(生徒が作って発表したスライド)  
(資料3にもあり)



**長野県の防災について**

まず長野県の防災対策を紹介しておきます

- 1つ目・・・地域の防災マップを作成する
- 2つ目・・・砂防ダムをたくさん作る
- 3つ目・・・マイタイムラインの作成
- 4つ目・・・霞堤の利用

などなど・・・たくさんの防災についての事

**マイタイムライン!!**

しかし・・・それを地域の人が知らない、意識していないという人が多いのが現状です!!

でもこのままだとダメよ。ダメダメ。僕たちは一昨年台風19号により大きな被害を受けました。防災について知識がなく被害にあってしまったという人がいるはず。僕も防災について学ぶまで知識がまったくありませんでした。そのため、話を聞いているうちにこのままだとダメだと思いました。そしてたくさんの方の話を学びました。

**今回学んだこと**

**マイタイムライン**・・・自分の家族構成や生活環境にあわせ、避難に必要な情報・行動を確認し、「いつ」「誰が」「何を」するのかをあらかじめ時間ごとで整理すること

↓

**スムーズな避難行動を実現させる!**

**避難準備品**

| 貴重品                | 応急医薬品                                      | 食料品等                                                   | 衣類                             | その他                                                                                     |
|--------------------|--------------------------------------------|--------------------------------------------------------|--------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| ・印鑑<br>・預金帳<br>・現金 | ・目薬<br>・傷薬<br>・胃腸薬<br>・解熱剤<br>・絆創膏<br>・消毒薬 | ・乾パン<br>・缶詰<br>・ビスケット<br>・チーズ<br>・チョコレート<br>・ミネラルウォーター | ・セーター<br>・ジャンパー類<br>・下着<br>・毛布 | ・携帯ラジオ<br>・懐中電灯<br>・マッチ<br>・ライター<br>・ローソク<br>・十徳ナイフ<br>・ビニールシート<br>・コップ<br>・缶切り<br>・ポリ袋 |



### 避難所

冷静でいられるのは子ども！

子供はいるだけで笑顔が生まれ、明るくなる！

避難所運営は子どもがしよう！！

避難所についての計画と意識を日頃から意識しよう  
ということなど、たくさんのことを学びました

### 今回の防災学習で学び考えたこと

僕は「千年に一度の災害は千年に一度の学びの場」という言葉が心に残っています。たくさんのひとが「今までの災害から学ぶ」と言っていました。防災を実現させるには、知識を持つことと災害が学ぶということが大事だと感じました。

また、事前の準備は最強だとも思いました。

みんなで防災意識を高めよう！！

### これからの自分の決意

まずマイタイムラインを作ってみる！そして、新たな防災を自分で学んでいきたいと思います。

その学んだことを家族から近所の人、知り合いなど沢山のの人に発信していきたいです。

最初はただ一人の学びでもだんだんと広げていき、地域全体の完璧な防災にしていきたいです

### マイタイムライン！！

#### レベル1

テレビを見て現状を確認する



#### レベル2

非常持ち出し袋の確認と補充

避難所について家族と相談（オレだったら屋代中学校）



#### レベル3

おじちゃんとおばあちゃん避難

（俺んちだったら）おじいちゃんおばあちゃんの荷物をまとめる

荷物を持ったり、整理したりして避難の手伝いをする  
自分の荷物をまとめる

#### レベル4

俺らも避難開始

俺はバックを持つのと妹の世話係

みんなでまとまって避難

屋代中学校に行く

#### レベル5

もう屋代中学校にいるはず

屋代中学校で妹の世話をしつつ、避難所運営の手伝い  
新たな情報を確認し、状況を常に把握しておく

### 作ってみて・・・

思ったより早めに準備や行動に移さないと危険だとわかりました。

また高齢者やちっちゃい子どもをどのようにカバーするかも大切だとわかりました。

これをもとに災害から命を守り防災を実現していきたいです

～おわり～

### Ⅲ 授業の流れと様子

#### 担当

全体進行：相澤 智先生

パネルディスカッション進行：早津 秀先生

パネラー：斎藤幸男氏（東北大学非常勤講師）、雁部那由多氏（東北学院大学）

和田 崇氏（千曲市危機管理防災課）

小松咲楽、酒井乃々果、若林路和、安藤琴羽、竹花和真（屋代中学校生徒代表）

#### 1、開会 … 3分

- a、授業の概要説明
- b、パネリストの紹介
- c、パネルディスカッションの開会

#### 2、パネルディスカッション … 45分

- a、パネルディスカッションの説明
- b、学習成果の発表および提言  
スライド作成。事前講演会、東北研修旅行で学んだこと、その後の避難所ワークショップ、千曲市危機管理防災課による防災講演会から。
- c、全体討議  
【パネルディスカッション】  
千曲市の防災の未来 ～災間を生きる私たちが今すべきこと～  
【キーワード】  
・千曲市の防災 ・命の学習 ・災間 ・家族、地域とのつながり ・周りへ伝える
- d、まとめ

#### 3、閉会 … 2分

- a、授業のまとめ
- b、諸連絡





(授業の様子)

雁部さん…中学生は地域で過ごす最後の機会。「防災」というと、知識になって行動になかなか結び付かない。日常的に考えること、緩やかに結び付けていくことが大切。かたい場面に出かけて行ってお話を聞く、ではなく、地域の人とお茶会など、大人が仲を取りもって、中学生が考えていることを地域の人に知ってもらえることが必要。

小松さん…学んだことや研修旅行から持ち帰ったことなど、親や家族に伝えた。家族とも災害時どう非難するか話し合った。保育園などに出かけていき、地域の方や異年齢の方との交流を通して、防災について学んでいかれたら、と思う。

和田さん…千曲市役所内の展示スペース「ギャラリー」で千曲市の過去の災害の展示を行っている。災害があったことを忘れず、備えていくという意識が大切。中学校（中学生）とも連携していきたいと考えている。

酒井さん…同じ地域に住む一人として、日ごろの行動を変えていくことが必要なのかなと思った。私たち中学生が「地域に密着した最後の機会」という言葉を聞いて、中学生の役割を考えていきたい。災害が、いい意味で身近に感じられるようにしたい。

若林さん…普段から考えておいて、いざという時にスイッチを入れられるようにしたいと思った。みんな慌てたり頼りたくなってしまうと思うが、自分たちがやるべきことを考えながら行動していくことが大切だと思う。

齋藤先生…避難所のマニュアルは縦割りが多い。大人は縦割りで生きている。縦割りの構造はスピード感がない。反対に子どもたちは横でつながる。いざという時はスピード感が必要。21世紀は感染症の世紀でもあるので、発想の転換が必要。避難所運営について、雁部さん実際に見たことを話してください。

雁部さん…（避難所について）ウェビングは大曲小学校で使われていた。ウェビングが適していたか、ではなく当時はそうするしかなかった。そこでは、災害時の縦割りの組織図が貼ってあって、まず人探しから始まっていた。〇〇系の□□さんがいない、本部長がいない、というような状況で、その縦割り組織図は使い物にならなかった。ウェビングは、次々に役割を書き込んでいき、要らなくなったら消すという方法で行った。最初からあるもの（決まった係）ではなく、その時その時で決めていった。避難所では、最初の一週間は地域で分けられていたが、「勉強する部屋が欲しい」「本を読む部屋が欲しい」という小中学生からの要望を受けて、勉強する部屋の確保が進んだ。小中学生も、避難所を運営する側で、役割をもっている。

小松さん…屋代中学校でも、避難所になった時、中学生が勉強していた。最初はそれどころではないと思うが、しばらくたった時に、(避難所は)日常生活を保証していくところでもあると感じた。

和田さん…台風19号の時は、後手後手になってしまった。その時の反省を生かし、一昨年市内の全小中学校に防災倉庫を設置し、災害時に必要な備品を用意している。

司会…「もしも」の時の話ではなく、日常的に考えていくことが大切。災間生きる、まさに自分(中学生)たち自身が考え伝えていくことが、次の災害に備えるいいモデルになるのではないか。



## IV 授業研究会記録

### ① 授業に関わって

長野県青少年赤十字賛助奉仕団会 堀込明紀委員長より

避難所はこれからの大きな課題となる。まずは命を守ることが第一で、避難所運営は人権問題など様々な課題を抱えている。今日の授業では、子どもたちが「自分ができることは何か」「自分たちが必要なものは何か」自分の役割についても考えていた。実際に東北へ行って、見て感じてきたことは子どもたちにとって大きなことだったと思う。

日本赤十字社長野県支部 組織振興課 山崎慎哉課長より

学ぶ、体験する、伝えるというサイクルを回しながら学んでいるところが良いと感じた。台風19号の時に、ウェビングを使えば、と反省が残った。災害が起きたとき、学校は必ず避難所になるので、中学生がきっかけとなり地域の方とのコミュニケーションがとれればよいと思う。

長野県教育委員会 学びの改革支援課 指導主事 小林里美氏

子どもたちが自分の言葉で語る、素晴らしい学びだった。酒井さんの中学生だからこそ考えられる視点が良かった。大人は堅苦しくなってしまうが、子どもたちならではの学びがあった。若林さんの「日常の中で」という言葉には、その場限りではなく、日ごろの姿が生きてくるのだと感じた。酒井さんの「災害を身近に感じる」という言葉がそれだと思う。防災を、かたい言葉ではなく、柔らかい言葉で伝えていきたいと感じた。周りにいる大人が、中学生の意見を吸い上げて、子どもたちが自由に語れる環境を作っていくことが必要。子供たちは、色々な考えをたくさんもっているのだから、言葉がけ、見守りが必要だと感じた。

長野県青少年赤十字指導者協議会 砥石順一会長より

東北への研修旅行で、子どもたちが実際に見た経験が大切だった。自分の想像をはるかに超えたとき、自分の立場でどう行動するかを考えられたと思う。生徒の「日常生活に結びつけて」という言葉で、方法等は深まってくると感じた。大川小学校を実際に見たことや語り部の佐藤さんのお話を聞いて、「今の自分は動けないと思う」「自分の命も周りの人の命も守れないのではないか」という、若林くんの言葉は率直で心に響いた。それが本当の気持ちだからこそ、災害や防災について考えられているのではないかと思った。

飯田市立山本小学校 富田 章校長先生より

中学生らしい考えがたくさん聞かれた。研修旅行での体験が、生徒たちの心を揺さぶったのではないか。防災を通して、中学生がまちづくりに参加していると感じた。小学校でも何かできないか、何ができるのか、考えていきたい。

② ウェビングについて（雁部さん、斎藤先生より）

避難所は、人間関係作りの場であり、お互いに理解する場でもある。どうやって避難所を作っていくのか、ウェビングを基本に自分たちでやっていくことが必要である。ウェビングでやらなければいけない、ということではなく、縦割りのマニュアルは必要である。災害発生から3日～1週間はウェビングの方がやりやすいということはある。マニュアル（縦割り）は大事だが、最初からこれでやろうとすると、必ずもめることになる。ウェビングの良さはスピード感である。横へすぐに広がるので、災害時にはこのスピード感が必要である。

25歳くらいまでの人は、小学校でウェビングを経験しており、決して新しいものではなく、防災へつながるものとしての選択肢の一つとしてあるものだと捉えたい。縦割りのマニュアルにも良さはあり、指揮系統がはっきりしているので指示が通りやすい。その時その時で必要な方法で行えばよいのだと感じた。

しかし、実際の避難所での様子をお聞きすると、「誰がこの役割をやるのか」「もともと自分はこの役だったんだ」「住んでいる地域が違うから（やらない、できない）」等、大人は縦割りの意識が強く、もめるのだとわかった。災害時には、何が必要でどう動くのか、スピード感という視点で考え行動したい。

③ SNSについて（雁部さんより）

災害時のSNSは危険である。情報の真偽がわからない。東日本大震災の時、石巻高校から送られてくる情報はたくさんあり、その際「アカウントはこれだけ」と決めておいた。それ以外はほぼ嘘の情報だと思った。

SNSは便利だが、発信しているのが誰だかわからないという危険性がある。防災教育に限らず、IT教育やモラルにも関わってくる、今後重要になってくるだろう。SNSの「情報は話半分に聞くことにしている。加工されたものかもしれないと思うからだ。発信元が確認できたものしか、確信できない。」

避難所では、強制的に顔と顔が見える環境になるが、普段からSNSに気を付ける必要があると感じる

④ 東北大学非常勤講師 斎藤幸男先生のお話

「自助、共助、公助」という言葉があるが、それには限界もある。「縁助」という言葉がある。これは、今までのくくりではなく、自分と人間関係がつながっていて、何かあったら来てくれるよ、という考え方である。

風水害、感染症など10年に一度ずつ、感染症が起こる時代になっている。SARS, MARS, コロナ…みんな同じ種類である。これからは、人権と防災はセットで考える時代になるだろう。命と向き合う教育が防災という教育である。

屋代中学校の研修旅行のスローガンである「A Starting Point」のように、これをきっかけに、千曲市の未来、ほかの学校、地域へのはじまりときっかけになればと願っている。



## V 成果と課題

生徒たちの「防災」についての学びは、調べたり聞いたりするだけにとどまらず、実際に東北へ研修旅行に行き、見たり聞いたりして体験し、そのことを誰かに伝えていく、さらに自分たちが発信し行動していく、というサイクルで続いている。誰でも言えることではなく、自分たちだからこそ言えることを、自分たちの言葉で伝えられたのではないかと思う。本時は、千曲市の防災課の方にも参加していただき、中学生がリアルに千曲市の防災に自分たちの思いを発信するいい機会となった。「防災」に関わるだけでなく、中学生ができることを考え、中学生だからこそできること、すべきことを伝え、行動していく意識が芽生えてきている。

今後は、知るための学び、行動するための学びを日常生活の中でも生かし、自分はどうあるべきか、についても考え行動できる生徒に育ってほしいと願っている。

## VI 資料

### (資料1)【始業式作文】

伝えることができる人に

3年5組 G, Y

僕が昨年度一年間で一番思い出に残っているのは、三月に行った東北研修旅行です。例年ならば、この四月に京都・奈良に行く予定でしたが、コロナウイルスの影響や東日本大震災から十年の節目の年ということなどから、今回は東北地方に行くことになりました。

研修旅行では、主に南三陸町、石巻市、松島町を訪れました。見学をする中で、僕が印象に残ったことは実際に震災と津波を経験した語り部の方のお話です。旅行に行く前にも学習をしていましたが、その場所で震災を体験したご本人から話を聞くことにより、被災した日にそこで何が起きていたのかということが、すごくよくわかり、印象に強く残りました。

そして、その中でも、特に心に残ったのは石巻市の大川小学校の見学です。大川小学校は十年前の震災で全児童の七割に当たる七十四名の子どもが、亡くなったり、今もまだ行方不明になったりしています。その場所で、当時小学六年生の娘さんを亡くした佐藤敏郎さんから話を聞き、あの日までの大川小学校のことや、あの日からの大川小学校のこと、そして、これからの未来のことを詳しく知ることができました。

佐藤さんは「今では『あの大川小学校』と言われているけれど、それまでは、大川小は特別でも何でもない場所だった。そして、災害とはそういう特別でも何でもない場所にふりかかる。」ということ話をしてくれました。

だからこそ、僕たち自身もいつ、どこにくるかわからない災害に対して、きちんと備えていなければなりません。長野県に津波はこないけれど、もし、何らかの災害が起きれば、きっとパニックになって行動ができなくなってしまうと思います。大切なのは、「その時にどうするか」ではなく、「その時まで何をしておくのか」ということだと思いました。日頃からこのことを頭のどこかに入れておきながら、これからも生活をしようと思います。

また、研修旅行から帰ってきて、家族や祖父母にも聞いてきた話をたくさんしました。みんな真剣に話を聞いてくれたし、何よりも自分自身がこんなたくさんのことを覚えていて、いろんな話ができることにびっくりしました。きっと自分が思っている以上に旅行で感じたことが大きかったのだと思います。

僕は、この「伝える」ということもがんばっていきたいと思っています。今回の研修旅行のことは生活ノートに書いてきた内容を先生が学活の中でみんなに紹介してくれました。「聞いてきたことを他の人に伝えていくことが研修旅行の本当の意味」という話を先生がしてくれて、なるほどと思ったし、自分がしたことを認めてもらえて、とても嬉しかったです。

今回の作文発表も最初は全校の前で話すのは恥ずかしい気持ちがあって、やってみようか迷っていたのですが、「自分から変わりたい」という気持ちが強く、立候補することができました。これからも研修旅行で感じたことや日頃から自分が思っていること、考えたことを多くの人に伝えられる人になっていきたいです。

今年は三年生で受験生にもなり、勉強も今までより大変になると思いますが、自分の将来のために頑張りたいです。また、部活動も最近は少しずつ試合に出られるようになってきました。コロナのために練習試合などは限られていますが、夏の大会に向けて、しっかりと自分ができる準備をしていきたいです。勉強、部活動、そして、「自分から伝えること」をがんばり、充実した一年間にしたいです。





## 大川小学校

### I 被災地、見学の状況

- ・宮城県 石巻市 大川小学校
- ・崩れた張り廊下、崩れた壁荒れ校舎



### II 得た教訓、復興に向けた取り組みの様子

2011年3月11日の東日本大震災から10年。授業復元をめぐっては通達の万や地蔵住民の声により大川小学校は、種力手を入れずに「存置」と決まった。

現在は市が震災遺構として整備を進めている。



### III その様子を見て感じたこと、学んだこと、考えたこと

被害にあった場所を残すこと、これは世の中の人に災害の衝撃を知ってほしいという思いが込められていた。

大川小の校歌にもなっていた、「未来を拓く」色んな人に災害の怖さを知ってほしい、私達がみんなに伝えていかなければいけないと思った。



## 未来サポート石巻

### I 被災地、見学の状況

- ・宮城県 石巻市 未来サポート石巻



### II 得た教訓、復興に向けた取り組みの様子

津波の影響を受けた石巻市では、建物に津波のマークがはられた建物があった。これは、津波の被害を受けた際に避難してこれることを示している。

また僕たちが訪れた伝承交流施設では、津波の恐さやどうなったか説明してくれた。



### III その様子を見て感じたこと、学んだこと、考えたこと

印象に残っているのは伝承交流施設にあった、復讐に折れた看板や津波の時に流れたかばん、などがあつた。土で汚れていた。そんな大きな津波の対策として津波の被害を受けた時に避難できることや、津波を呼びかける映像などがあつた山に囲まれているからといって油断はできない、千曲川が決壊したらどうする。日頃からの対策を見習わなければいけないと思った。



## 港水産・石ノ森萬画館

### I 被災地、見学の状況

- ・宮城県 石巻市 港水産

- ・宮城県 石巻市 石ノ森萬画館

港水産では、たらこをつくりました。たらこを作るには筋をとったり丁寧に扱わなければいけなくて、思っていた以上に大変でした。

石ノ森萬画館では、過去の仮面ライダーがたくさん飾られていました。



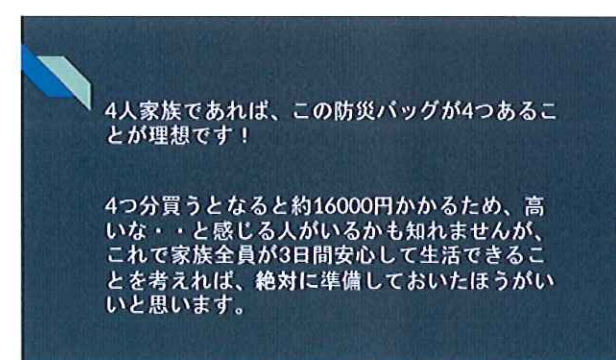
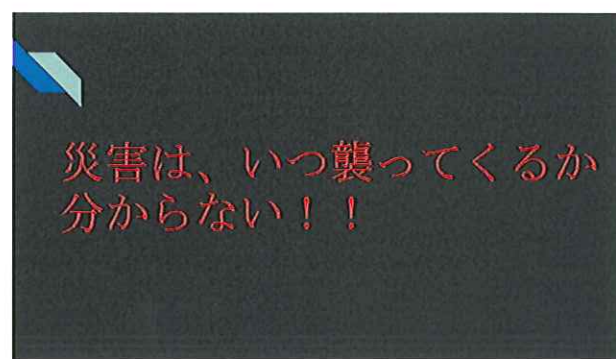
## まとめ

私達が行った研修旅行は、いろいろなことを学びました。津波の被害から10年という長いようで短い時間、たくさんの工夫がされていました。地震や津波を想定して二度と同じようなことを繰り返すわけにはいけないと思いました。僕たちも他人事ではありません。津波が来ないにしても、地震、洪水、千曲川が氾濫。明日おきるかもしれない。災害は特別な日に来るわけではありません。いつ起こるかわからないからこそ、恐怖なのではないでしょうか。いつ災害が起きても大丈夫なように日頃から、送るためのルートを確認したり、備えるようにしたいです。





矢印の示す辺りまで水が来ました。







私の家では1階の部屋に置いてありますが、玄関にこのように置いておくにより落ち着いて行動できると思います！

### ③家族と避難場所や避難経路についてよく話し合っておく



私達がやらなければならないこと  
(避難直前)

- ①ブレーカーを切っておく
- ②ガスを止めておく



二次災害を防ぐための対策！

### まとめ

災害が起きる前の準備はものすごく大切！

焦らずに避難に行く前の二次災害対策をすることも大切！

皆さんもいつ襲ってくるかわからない災害に日頃から備えておきましょう

おしまい

ありがとうございました

(資料4) 【生徒のまとめ「防災学習を通して～災間を生きる～」】

- 「千年に一度の災害は千年に一度の学びの場」という言葉が心に残っています。災害があっても悲しみに暮れるだけでなく、それを生かして学び次に活かすことが大切だとわかりました。また、防災に近づけていくには、一人ひとりの意識と実際に行動をするかにかかっているとわかりました。日頃からの避難訓練など実際に起きたことを想定して行うことがとても大事だし、なんかあったら、自分優先で考えることも大事だとわかりました。

大人はたくさんの知識があるので逆に油断してしまい、逃げ遅れたり逃げなかったりするとわかりました。その大人を現実と直面させたり、油断させずに早く逃げるには子供の力が最も良いと思いました。研修旅行で実際に街を見て、たくさん復興に向けて活動をしていて、悲しみに暮れるのではなく、未来を見て明るく復興をするのは大切だと思ったし、そのことを、たくさんの幅広い世代に伝えていくことは、防災にもつながるし、復興の希望にもなるのかなあと思いました。

斎藤先生のお話で避難所運営は、大人に任せるのではなく、子どもが積極的に運営をすることが大切だとわかりました。積極的に行うことで、誰かの励みになったり、今後の希望になったりするとわかりました。

地域の防災は砂防ダムやハザードマップ、マイタイムラインなどたくさんあるとわかりました。そのことを知らないという人がとても多いことがわかったので、発信していきつつ自分でも新たな知識をつけていくことが大事だと考えました。

災害を完全になくすことは出来ないけど、備えることはできる「備災」を知って、自分は何も備えてないという現状を知りました。そのため、マイタイムラインを作りました。実際に作ってみて、思ったより早めに行動してキパキと判断をしていかないと間に合わないとわかりました。これから、さらに災害から備えることを続けていきたいし、今回習ったことを沢山のの人に発信していきたいです。最終的には、一人の備災から地域全体の備災にしていきたいです。

- 東日本大震災では地震から津波が来るまでに時間がありその間に大切なものを取りに行ったり、前津波が来たときよりも少し高いところに行って津波に飲み込まれてしまった人がいるとのことでした。このことから自分は経験に頼ってこれくらいなら大丈夫など決めつけずに最善を尽くすのが必要だと思いました。また絶対に安全とならない限り戻ってはいけないのだと思いました。そして、避難所だからといってそこに逃げずに川の近くや海に近いところ低いところにある所に逃げてはいけないのだと思いました。また親や友達が逃げているか心配だからや、大切なものがあるからと言って、家に戻ったりしてはいけないと思いました。津波ででんこにあるように自分のことだけを考えて逃げるべきなんだと感じました。

斎藤先生の話で避難所運営に大切なのは縦割り意識ではなく最初はWEBを意識して行動することが大切なのだと思います。そして避難所運営は大人に任せるのではなく我々中学生も積極的に参加し、意見を言い大人とともに避難所運営をする必要があると思いました。また中学生の言葉は大人が言うときよりも



ときに力が強いということがわかりました。そして自分たちが行動することによって、いがみ合いなども減少するのではないかと思います。

自分の地域の防災では雨や川の反乱による水害は心配ありませんが雨などにより土壌が柔らかくなって起こる土砂災害を警戒する必要があると思いました。そして斎藤先生の話聞いてもし土砂災害で避難所に避難したときはWEBの考えが必要だと思いました。また災害は完全に防ぐことはできず県や市が行っている防災を過信せず自分で備災をすることが大切なのだと感じました。そして備災として自分はハザードマップを確認することと、防災バックなどを作ることを考えました。自分の住んでいるところでは、河川の氾濫はありませんが、土砂災害で避難するときにはもう家には戻れません。だから玄関などに避難生活に必要なものを入れたいと思いました。まず薬やメガネなど生活に必要なものや缶詰やカンパンまた飲料水などを大量に入れておく必要があると思いました。また避難所運営を手伝うとしたとき、手袋などがあるとやりやすいと思いました。また自分で調べてこれを持っていきたいと思うものもあります。まず懐中電灯です。これがあると暗いところにも行くことができます。2つ目は、ビニールでできたプチプチシートですこれがあると体温を高く保ったり、地面に寝るときこれをしくだけで筋肉痛になりにくくなります。また枕の応用品としても扱えます。3つ目はラップですこれを持っていくことで寒いときは体に巻くだけでプチプチシートと同じように体温を保つことができます。また水が貴重なところでは、皿やタッパーに巻くだけで洗わずにラップを捨てるだけでまた使えます。

自分は話を聞いて、もしものときに備えた備災が必要であり、避難してもすべて大人任せるのではなく自分も参加することが大切だと感じました

○ 私の考える、「災間を生きる」私達とは、「災害は自分の身の回りでは起きない」と思っている人や、「災害は起きて自分への被害は少ないだろう。」などと思っている人に災害はいつ起こるかわからなくて、今の時代どれぐらいの被害を受けるかわからないと言うことを伝え、防災について学んでもらう事が必要であり、自分の大切な人、守りたい人に教えて命を災害で奪われないように、災害の恐ろしさを忘れさせないことを頭に入れておかなければならないと思いました。

斎藤先生のお話を聞いて、私は「専門家ほど油断する」という言葉がとても印象的です。実際に水の関係の仕事についてる人が流されている動画をみました。お話を聞くと、流されていた人の役職にとっても驚きました。台風19号のときは私は何も知らず、行動はすべて大人に任せてしまいました。これからは家族を巻き込んで正しいと思う行動をしたいです。

今の時代、被害に遭う可能性もたくさんあります。もし自分の身の回りに危険を感じ、避難をしたあとでも課題はあります。家族を失ったり、他の人に何が起こったかはわかりませんが、思っている以上に運営がうまく行かないそうです。そんなときは子供が重要だそうです。

自分の大切なひとを守るために、安全な避難、避難所でも中学生が積極的にお手伝いして、子どもたちみんなが地域の役に立てるように避難所が一つになることも学びました。災害が起きる前にしておくはあります。それを徹底していつ起きてもいいようにしていきたいです。

○ 東日本大震災は私が4歳のときに発生しました。当時の私はテレビを見て本当にこんなことが起こっているのがよく理解できていませんでした。けれど震源地から遠く離れた長野県でもかなりの揺れを感じたことは覚えています。長野県でもかなりの揺れを感じたため震源地である宮城県ではどれほど強い揺れが起きたのだろうと思っていました。

そして、東北研修旅行をきっかけに防災学習を始めて、東日本大震災がどのような災害で、どのような被害に遭ったのかを詳しく知ることができました。研修旅行中に現地の方から『専門家ほど油断する』というお話を聞きました。その話を聞いて私は災害が起きたときに油断しないためにも専門家や大人の情報を鵜呑みにせず、自分で考えてみようと思いました。

東日本大震災では地震の被害より、二次災害の津波のほうが被害を受けました。私の住む長野県は津波は来ないけど、二次災害として土砂崩れが起きる可能性は十分にあります。地震が収まったからと言って安心せずこれから二次災害が起こることを想定した行動を取りたいです。

防災学習では斎藤先生から東日本大震災からの教訓などを聞くことができました。お話の中で私が印象に残っているのは『避難所で中学生にしか出来ないことがある』ということです。避難所では私たち中学生が掃除や力仕事など、率先してやるべきことがたくさんありました。また私たちが元気に避難所で過ごしている姿は大人の方々にとって、希望を与えてくれるということを知りました。私は避難所生活の経験がないため、避難所に避難したときはどのようにすごせば良いのかを今まで知りませんでした。これから、避難所に避難するときにあったら自分から率先して動き、元気に過ごすことを大切にしたいです。

また、私はワークショップを経て、防災について考えて自分の地域のハザードマップを確認しました。そして私の家が安全ではないことを知りました。ハザードマップを確認しなかったら知らなかったことがたくさんあったので確認して良かったです。これから防災を怠らずにしていきたいです。

○ 東日本大震災の前にチリで大地震が起こったときに、東北まで何日もかかって津波が来たとき、当時の人はそこまで津波が来ていなかったから今回の津波もそこまで来ない、と昔の経験を頼りにしてしまったそうです。そのせいで十年前の東日本大震災のときに対応が取れなかったから、今と昔とでは全く違う被害が出るからしっかりと備えておいたり、自分の行動に信じて自分の命は自分で守るだったり、大人より若い人のほうが判断がしっかりとできると聞いたので、大人ばかりに頼らずに自分での判断もできるようにしていきたいと思います。

いつ災害が起こるかわからない世の中で過ごしていく中で、どんな事を考えて行動していくかが重要だと思いました。例えば、災害が起こったとき、何を優先的にやるかの優先順位を考えたり、避難所に行った場合、何が自分にできるかをしっかり考えて避難所の運営をするなど、積極的に行動していきたいと思いました。また、どのタイミングで避難するかもとても重要だと思います。僕の家には足の不自由なおばあちゃんがいるから、地震でブロック塀が倒れていたり川が反乱して水が来ていると、避難するのはとても難しいと思います。だから家族のことも考えて避難するタイミングをしっかり考えていきたいです。そして最後に長野県は地震による津波は来ないけど、将来海の近くに住んだりした場合、人に頼らず自分の力だけでもしっかり避難できるように、普段から自分の行動に責任を持って行動していきたいです。